

な気がする。

我々も過去を懐かしがる年代に入ってしまった。

過ぎし日をふり返るのもいゝが、半歩でも前へ進まねばと思ふ此の頃である。

## 能代・NOW (杉から松・ブナへの景観)

新制11期 宮腰 瑞夫

能代浜に面している黒松林が、朝日新聞による「日本の森100選」にノミネートされてから久しい。開発事業による山林・丘陵地の減少とともに、残された自然林が見直されたからでありましょうか。

かつて、材木町を散策する杉丸太から独特の秋田杉の香りが往来し、木材都市・能代を否応なく感じさせてくれた。しかし、一部を残してもはやない。その木都の変貌ぶりには、毎年、訪れるごとに驚くほかない。

東京から材木商人が訪れたら、能代浜の松林を展望できる恰好の地へ案内するのが良いと、子供の頃、父から言われたことが耳に残っている。社会人になってからこの景観を拝見できるチャンスがあったが、「緑のじゅうたん」と言っても過言ではない。全く素晴らしい自然景観だった。今も変容していないだろうか。

毎年、八月初旬、男鹿半島の名所旧跡・西男鹿海岸線を探訪している。特に加茂青砂から桜島の景観・水質は他を圧倒する。

男鹿をあとにして、八郎潟干拓地中央道路から国道7号線経由で約40km、やっと能代にたどり着くが、近い将来、この南北の道路網の一部が拡張・延伸すると聞いた。延長上には向能代(落合地区)へのバイパスとしての橋梁工事が着々進められている。米代川・出羽丘陵をバックに、モダンな絵画となるようなニューブリッジを完工してほしい。

これまで、能代の街づくりは、南下方向をつづけ、自動車販売会社・レストラン・ショッピング

施設等が進出し、さらに東西連絡網が整備されてきた。そして、いよいよ南北を縦貫する7号線から101号線への連結が完成すれば、南は、銀河連邦としての東大ロケット研究所から始まり能代浜自然林→原子力発電所→能代港→落合レジャー施設群→八森町の白神山地と有望な観光資源が勢揃いする。

これらの連結部分に、耐寒・耐火型のベンションやニューハウス群およびこの貴重なランドスケープを高位置から遠望できるリゾート施設が立ち並ぶ時代が来るように期待している。

今年の夏は、八森町の真瀬溪谷から白神山地のブナ林を見学した。道中で、秋田杉の美林と出会い、ほっそりした円錐の姿、整然と並び立つ美しさには「天然杉」の造形美を訴えられた。また、溪谷から脇にそれると「能代釣倶楽部」のハウスが静かに立っていた。

ブナ林への春秋林道を飾るには勿体ないが、手近かにこれ程の美林が残されていたことが無上の喜びであった。いわゆる「自然」の恵みが乏しくなっている都市生活者にはうらやましい限りの景観・たたづまいではなかるうか。

惜しいかな、ブナ林は濃霧にさえぎられ、朦朧として「クマゲラ」も確認できなかったが、帰路の秋田杉に見送られ深山幽谷を振り返った。冬には日本海の猛吹雪に鍛えられるのだろう。

木材需要としての大栄華を極めた「杉」の時代から、自然休養林・保健保安林としての「松」や、豊かな森の生態系としての大原生林「ブナ」への移行時点にさしかかっているのかも知れない。

(所沢市在住)

## 総会の“すそ野”を広く

事務局長・旧制19期 小林 肇

「年に1回の同窓会の総会に、もっと若い層の人たちが集まってくるよう“すそ野”を広げたい」  
—東京同窓会の事務局長として、いま痛切にこう感じています。

初めに、東京同窓会の近況をご報告しましょう。

事務局で把握している会員は、旧制全部と新制の31期生(27歳)まで。そして、その数は62年9月末現在で2,225名に達しました。もっと若い年代の卒業生や学生まで加えると、いわゆる同窓生の実数は、おそらく3,000名を超えているかもしれません。ともあれ、2,225名の内訳は、旧制が204名、新制が2,021名で旧制の占める割合は、ついに全同窓会員の1割をきってしまったのです。つくづく“時の流れ”を感じざるをえません。

いずれにしても、同窓会員が年ごとに増えているのは心強い限りですが、その半面、心配ごとがないでもありません。総会への出席者の顔ぶれを見ますと、いつも若い人たちがグンと少ないことがそれです。具体的にいいますと、年1回の総会に集まる常連は、旧制と新制の13期ぐらいまで。年齢的には、45歳以上の人たちが3分の2で、それ以下の人たちは3分の1ぐらいにしかすぎません。こんな調子でいくと、先が思いやられるというものでしょう。

そこで、若い人たちに関心を持ってもらうには、まずいまの総会の“功德”をPRしておくほうがいいかもしれません。私自身の経験からいいますと、同窓会の総会は会員どうしが親睦を深めると同時に、後輩が先輩から人生の教訓をうける“人間交流の場”だと思っています。

私には、その意味で忘れられない先輩がいます。日立製作所の元役員をしておられた腰山巳代治さ

んです。腰山さんは、旧制1期の大先輩。本来なら、私などのような末輩は、そばにも寄れない人でした。それが、同窓生ということで、総会でもよく一緒になり、その都度話をかわしては、いろいろ教わることがたくさんありました。例えば…。

確か、10年ほど前の総会でのことでした。腰山さんが突然「小林さん、今日の会社経営の難しさは、どこにあると思いますか」というのです。とっさに返事をしかねていましたら、腰山さんはこういわれたのです。

「あのね、いまはすべての技術は、内外ともに殆んど同じレベルにある。これからの競争はサービスしかない」

雑貨卸しの私の仕事などは、まさにクライアント(顧客)に対するサービスが生命であるだけに、このひとはズシンと身にこたえました。これなどは、お互いに利害関係のない同窓生だからこそ忌憚なくいい合えるわけで、これが同窓会のありがたさだといってもいいでしょう。

もうひとつ、腰山さんからはこんな話も聞かされました。

「人間、40歳までは会社のためにつくせ。その後、50歳までには、いかに社内外の人とたくさんつき合うかが大事。それを、60歳までにさらに熟成させる。この努力が、結果として自己の完成につながり、退職しても広い人間関係を持って豊かな人生を送れます。」

重ねていいますが、こんな親身な話を聞けるのは、やはり同窓会だからこそでしょう。こんな良さがあるのですから、若い人たちにはもっと積極的に総会に参加するようにしてもらいたいです。社会人として、人間としてのふれ合いを、同窓会に求めてほしいのです。